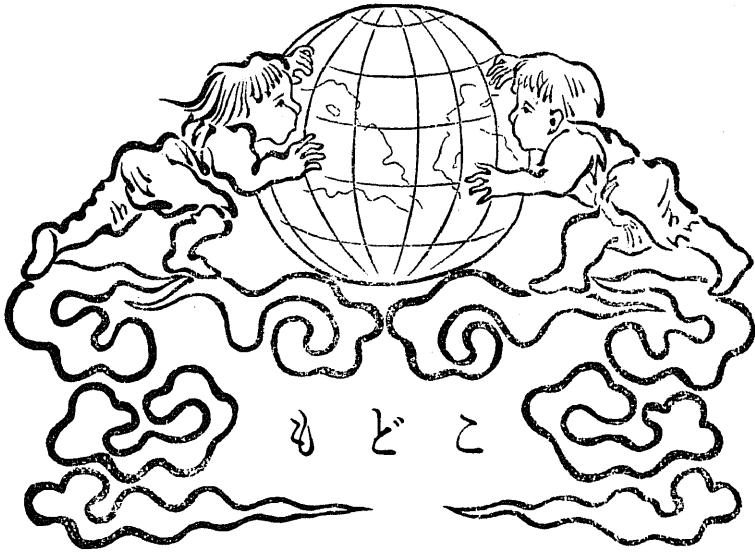


も どり と 人 婦  
號 十 第 卷 貳 第



六 人 の 武 者 修 行 (きつじゆ)

やまとの翁

いよく勝負がついたので、  
百里次郎が王様の前にて、  
始の約束通り。お姫様を下  
さいといいました。

さし、そこで王様は困り  
ました。自分も、たゞの平  
民にたつた一人のね姫様を  
やりたくわなし、又お姫様  
とても、そこからよその

人ひとにつれられて行くのわ、  
いやだと申まをすので、どー  
にか、此この災難さいなんをのがれよ  
ーとれ考かんがになつて、とー  
く次の様ような計畧けいりやくを考かんがへ  
出だしました。まづ、御殿ごてん  
の中なかに、一ひとつ鐵てつのお座敷ざしき  
をこしらえた。屋根やねも鐵てつ  
でゞきて、床ゆかも窓まどの格子こうし  
も、すつかり鐵てつで造つくつて、  
さて其中そのなかえ立派りっぱな食卓しょくたくを



用意して、れ酒だの、御馳走を澤山に井べて、さ  
て用意がちやんと出来上  
つてから、彼の六人の武  
者修行を、このお座敷で  
御馳走するからといって、  
よびよせました。

六人の人々わ、王様の

悪企を知りませんから、れかた、お姫様を下さるお祝いだろ  
ーなごゝ思もつて、喜んでやってきました。そこで、何心なく  
此お座敷に這入ったのを見すまして、王様わ外から、ひしやん



と、入口の戸に鍵をかけて仕舞つて、それから、風呂番の三助にい一つけて、床の下から、どんく火を焚かせにかゝりました。つまり六人の者を火あぶりにして仕舞をーといふ考なのです。

座敷の中でわ、六人の人々わ、食卓をとりまいて、お酒を飲んだり、御馳走をよばれたりして、面白そーに、笑つたり話をしたりして、やつて居つた所が、暫くすると、何だか、お座敷の中が、急に暖くなつてきた様な心地がする、けども、皆わ、不思議とも思わないで、お酒を飲んだ故だろーなんかと、思つて、別に氣にも止めないで居たのです。所が、だんくだんだんと熱くなつて来て、とーとー、立つても座つても居られない

程になつてきた、それもその筈、天井から窓の格子から、何か  
ら何まで火でやけて眞赤になつて來た。そこで六人の人々わ、  
仰天した、入口の戸を開こーと思つても、固く鍵がかゝつて居  
る。

そこで、始めて知つた王様の惡企、姫を呉れるのがいやさに  
吾々六人を焚き殺そーとゆーのか、と六人の者わ、齒を食いし  
ばつて怒り出しました。所が、横つ丁笠の寒井國冬が。

『うん、そーだ、それに違なした。随分惡いな。けども諸君、  
僕が一番、こゝで大霜を降らして、此火を消して見せる、そし  
て王様を吃驚させてやろー』

こーいーながら、國冬わ、今まで横つ丁に被つて居た笠を

眞直に頭の上に直した所が、これわ不思議、あんなに暑かった  
 お座敷が急に冷くなつてきて、見て居る中に、れ酒や肉までが  
 かたく凍つて仕舞つて、丸で寒中の様な有様で、今度わ、六人と  
 も寒くつてくぶるく、慄えて居る。外わ眞白く霜が降つて居  
 る。

それから二時間もたつてから、も一六人とも皆、黒こげにな  
 つて死んで仕舞つたやろーと思つて、戸の鍵をはづさせて、王  
 様が自身で、中を見に來ました。所がこれわ意外、六人とも黒  
 こげ所か、丸で生きくしてお酒を飲んで居て、あんなまり寒く  
 つて勘らぬから、外え出して下さいといふことである。

王様わ、一時わ大變に吃驚しましたが、何れ揃つて不思議な者

ども、とても殺すことわ、六かしーから、れ金をやっつて、姫を助けることにしよーと、れ考江直したもんですから、直ぐ頭分の兵太郎をよびよせて、相談をしました。

『どーだ、若し金が要るなら、欲しいだけやるから、どーか、姫を置いて行って呉れないか』

『兵かしこまりました。私の家來が一人で持てる丈けで宜しいから、夫丈下さらば、お姫様と交換致しましよー』

そこで王様も、一人で持てる丈とい江ば、知れた金だ、これで助かることなら、甘いもんだと喜ばれて、早速受取りにくる日をきめて其とーり約束しました。

すると、兵太郎わ、家え歸つて、大急ぎで、國中の仕立屋を

残らずよび集めて、一月ほどかゝつて、夫わく大きな一つの袋を縫わせました。さて約束の日になりますと、例の大木を根ひきにした大力の金太郎が、この大袋を肩にかついで、一人でのっさくと王様の處に出かけました。

これを見た王様わ、驚いた、『何とゆゑ力の強い奴だろ！、こんな大きな袋を持つてくるとわ、これでわ、どの位の金を持つて行くか知れない』と一人て御心配になつて居る。

それでも、しかたがないから、まづ金の塊を三百貫だけ、やつと十六人に持たしてきて、金太郎の前に置かせると、金太郎わ、それをちよいと、片一本の手で持つて、ポイと袋の中へ投げ込んで、『何んだ、こればかりの金を？ 袋の底の一隅に這入つて



仕舞しつたじやないか、さー一度いちどに、もつとどしく持もて來きた

く』

それから、王様わさまわさしづして、幾いくつもの庫くらから、たんくと寶たから物ものを出ださしてくる、持もつてくる、と金太郎きんたろうわ袋ぶくろの中なかに投なげ込こんで仕舞しう、もーよかろーと王様わさまの方はで思おもうと、金太郎きんたろうわ、『またくこれじや、袋ぶくろの半はん分ぶんにも足たらない』といいつて居ゐる。とーくお仕舞しに七千輛しちせんりょうの車くるまに、金きんだの、銀ぎんだの、寶物たからものだのを一杯いちばい積つみ込こんで、夫それを牛うしに引ひかして持もつてきましました。所ところが金太郎きんたろうは夫それを皆みな一ひとかたまりにして、袋ぶくろの中なかに、ねぢこんでしましました

『寶物たからものも、牛うしも、車くるまも、みんなゴツチャにしてねぢこみました

が、また夫それでも袋ぶくろ一杯いちばいになりませぬ。そこで金太郎きんたろうわ、『何なんでも

いーから 這はいるだけ持もって行くのだ、見みつかりしだい何なにでも  
持もってこい』と  
いーだして、と  
いーく 澤山ざんざんな庫くら  
をみんな空か虚こに  
して仕舞しまって、  
金かね』さーこれで  
よしにしよー。  
袋ふくろわまだ一杯いっぱいに  
ならぬけれど、  
これ丈ただの方が、





反つて、しほり上げるのに都合がいー』

こーいって、大きなく袋を、ヤツコラサと肩にかついで持  
 って行きました。すると、兵太郎も『さー、もーいーから、皆  
 で一所に歸ろー』といつて其國をたちいでました。

さーこーなると、王様の方でわ大變になつた。何だつて、國  
 中の寶物を一つも、残らず持つて行かれたんですから、これわ  
 こーして居られない。すぐ追っかけて取り戻さんければ、とゆ  
 ーので、命令を軍隊に下して、急いで六人を追かけさせました。  
 そこで、まづ一千人の兵隊が馬に乗つて二手に分れて、追つ  
 かけて、後から大聲をあげて、よばりました。

『貴様たち、逃げよーとて逃がさぬ、すなをに金の袋を渡さは

よし、渡さんければ、一々引捕江て、首をたゝき斬るぞ』

しますると、六人の一人の風尾吹彦が、立ち留つて

『ハツハツ、ハツ、ハツ、ハツ、八釜しし、逃がさぬとは、よくいーおつた、それならば、まづ吹彦が、鼻息で、汝等を大空高く飛ばしてやろー』

といつて、いきなり、片々の鼻孔をおさねて、片々の孔から思ひいれ鼻息を吹きだして、二手に別れてきた一千人の兵隊を物の見事に空中に吹きとばしてやつたのです。すると、片一方の五百人わ、右の山の上え、半死半生になつて落つちちるし、一方の五百人わ、左の方の河の中におつちちて、みんな溺れて死んでしまいました。夫から六人わ、無事に家え歸つて、持つ

て來た寶物をめぐりに分配して、お仕舞まで仲よく暮らして  
行きましたとさ

めでたしく

こどもが、いけのそばへ、行って、みづのなかに、  
かへるが、たくさん、いるのを、みて、おもしろがっ  
て、それに、いし、を、なげつけて、ころして、いる  
と、一びきの、かへるが、ひょいと、みづのなかより、  
あたまを、もちあげて、

こどもさん、どーか、やめてくださいな、あなたわ  
おもしろいでしょーが、わたしらわ、ころされてい  
るのですよ。